

モンスター理論からみた少年マンガの「鬼」

— 「鬼滅の刃」を事例として—

Examination of *Oni* in Shonen Manga from a Monster Theory Perspective

— With Focus on “Kimetsu no Yaiba: Demon Slayer” —

井島ワッシュバーンパトリック

Patrick IJIMA-WASHBURN

崇城大学芸術部 非常勤講師

Sojo University Faculty of Art, Adjunct Professor

キーワード：マンガ、鬼滅の刃、モンスター理論、民俗学、鬼

Keywords: comics, “Kimetsu no Yaiba”, monster theory, folklore, oni

Summary

This study examines how *oni*, demon-like creatures of Japanese folklore, are expressed in the popular Japanese comic series “Kimetsu no Yaiba” by Gotouge Koyoharu serialized in *Weekly Shonen Jump* from 2016 to 2021 by applying a framework called Monster Theory. The publication of this theory advocated by Jeffrey Jerome Cohen and made up of seven theses regarding the nature of monsters, marked the beginning of a surge in popularity of studies and research related to monsters in Europe and the United States and is a theory that attempts to clarify the meanings of monsters that appear in various modern media creations.

Previous studies have shown that the presence of monsters has been useful as an indicator of social normative and non-normative distinctions, but such analyses have been primarily focused on the explication of literature and cinema. In this study, I would like to provide an example of the application of monster theory to the graphic narrative format — specifically the medium of Japanese comics. As “Kimetsu no Yaiba” provides nuanced expressions of *oni*, monsters that have a long history in Japan and are tied intimately to various aspects of Japanese culture past and present, it will serve as a worthy example of a robust application of the Monster Theory framework to the graphic narrative format. Through such application, I would like to develop a deeper understanding of the psychology that society has toward the self and the Other and uncover examples of alternative viewpoints within the work related to the attitudes the author thinks people should hold in regard to the self and those Others.

First, I will give a short introduction to Monster Studies and Monster Theory and its applications, especially to the medium of comics. Then I will discuss the evolution of the monster’s role in society and the history of *oni* in Japan. After describing typical perceptions of *oni* and traditional representations of *oni* in Japanese comics, I will delve into how the main characters and *oni* of “Kimetsu no Yaiba” provide clear examples of

several aspects of Cohen's Monster Theory, and I will give examples that relate to each of the seven theses contained within the Monster Theory framework to expose the potential of the work as a tool for developing new more nuanced attitudes toward the self and the Other.

1. 問題と目的

1996年、ジェフリー・ジェローム・コーエンは「モンスター理論 (Monster Theory)」という学問分野を提唱した⁽¹⁾。それ以降、モンスター研究を行う大学の授業および専攻、並びに数々の論文や教科書が誕生し、欧米の学界全体で注目を集めてきた。モンスター研究がこのように隆盛した要因としては、「モンスター」を深く研究する必要性が短期間にひろく認識されたためだと考えられる⁽²⁾。前述の研究は、哲学、社会学、人類学、歴史学、精神分析学、記号論などの多種多様な分野に広がりを見せ、その後「モンスター」および「怪物・怪異」に焦点を当てた研究が蓄積されている⁽³⁾。これら多分野の研究から構築されたフレームワークはその後、さまざまな文化的創作物を理解するために活用されてきた⁽⁴⁾。しかし、これまで主な分析の対象となってきたメディアは、文学作品および映画であり、分析対象であるモンスターを最も多く生み出している「マンガ」はあまり研究対象とされていない⁽⁵⁾。本研究では、現代日本を代表する人気マンガ作品を事例として、モンスター理論が作品をより深く解読するための有効なツールになることを明らかにする。

2. 方法

集英社の『週刊少年ジャンプ』で連載された人気作品、吾峠呼世晴の「鬼滅の刃」⁽⁶⁾は「鬼」と呼ばれるモンスターを取り上げている（以後、「鬼滅」「本作」と略記する）。本作に登場する鬼たちは、伝統的な日本の昔話や民間伝承に登場する鬼とは姿も性質も異なっており、全く新しい種類の生き物のように思える。「鬼滅」の鬼が吸血鬼に似た容姿で描かれている点や美しい姿の鬼も存在する点などから、古典的な鬼との違いは明らかだと考えられるが、これらの新しい鬼は、ノリコ・ライダーが古代の物語における鬼の特徴として述べている「幻想的、悪魔的、そして人食いだがかリスマ的」と当てはまる点など、いくつかの類似した特徴も見られる⁽⁷⁾。本研究では、こうした新しい種類の鬼が、民話などの鬼と同様に「非正常性」を表す存在として物語の中でどのように機能しているのかを示す。また、鬼と対峙する立場となる主人公の存在も重要な要素だと考えられることから、古代および現代の鬼物語において、主人公が鬼に直面した状態で持つ感情のあり方についても分析を試みる。

本研究では、主にコーエンが提案したフレームワークである「モンスター理論の7つのテーゼ」⁽⁸⁾を応用し、本作に登場する鬼と主人公との関係を分析する。後述す

るように、コーエンの「7つのテーゼ」は、現在隆盛しているモンスター研究の源となった画期的な論考であり、民間伝承、文化、メディアにおけるモンスターの影響・意味を論じる際には必須の視点となっている⁽⁹⁾。

近年稀にみるヒット作となった「鬼滅」をめぐるには多くの評論がなされた。まとまったものとしては、例えば井島由香「『鬼滅の刃』流 強い自分の作り方」⁽¹⁰⁾で、キャラクター達が鬼になった原因を心理的観点から考察し、作品から子供たちが何を学べるかを論じている例がある。大勝裕史「『鬼滅の刃』における〈怪物的なもの〉：資本主義の隠喩としての人喰い怪物」⁽¹¹⁾では、鬼の人食い衝動が資本主義の消費力の象徴だと論じている。このほか、登場人物についての分析は多くあるが、本作に登場する「鬼」に焦点を当て詳述した論考はない。

まずは、「モンスター理論」の概要と「鬼」という古来からの日本の怪物の代表の一つについて簡単にまとめたいと思う。

3. モンスター研究の現在

1996年、ジェフリー・ジェローム・コーエンは「モンスター理論 (Monster Theory)」という学問分野を提唱した。それ以降、モンスター研究を行う授業および専攻、並びに数々の論文や教科書が誕生し、欧米の学界全体で注目を集めてきた⁽¹²⁾。もちろん、コーエンの論文「モンスター文化：7つのテーゼ (Monster Culture (Seven Theses))」⁽⁸⁾が発表される以前からも、様々な分野

の専門家がモンスターについて考えてきたが、コーエンの登場は画期的なものだった⁽⁹⁾。コーエンの「7つのテーゼ」は「影響力のある⁽¹³⁾」「分野の独創的なテキスト⁽¹⁴⁾」で「重要な研究で繰り返される多くの重要なアイデアを提供する⁽¹⁵⁾」ものと評価されている。

3.1 「モンスター理論」の浸透

1996年から現在まで、「モンスター理論」というキーワードは学界で大きな話題を呼び⁽¹⁶⁾、文学作品に存在するモンスターを中心に多くの研究が蓄積されている。コーエンはミシェル・フーコー (Michel Foucault) の「逸脱」⁽¹⁷⁾や「狂気」⁽¹⁸⁾を踏まえて論じ、その後、マルキシズム⁽¹⁹⁾、ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) の「卑賤」論⁽²⁰⁾、民族理論⁽²¹⁾、ジェンダー理論⁽²²⁾、ゴシックホラーを通してみた19世紀の「性」⁽²³⁾、クィア理論⁽²⁴⁾、ジュディス・バトラー (Judith Butler) のジェンダー行為遂行性など多種多様な領域からモンスターが論じられた⁽²⁵⁾。

ただし、これらの分析対象のほとんどは文学及び映画が中心となった研究である。

3.2 「モンスター理論」とマンガ

2019年から2020年にかけて、3冊の研究書がマンガというメディアにモンスター理論のレンズを向けた。キアナ・ウィテッド (Qiana Whitted) が著した『EC Comics: Race, Shock, and Social Protest』⁽²⁶⁾は50年代のホラーマンガブームを起こしたECコミックスの作品を通じた社会活動について分析し、マヒーム・アメッド (Mahaan

Ahmed) が著した『Monstrous Imaginaries: The Legacy of Romanticism in Comics』⁽²⁷⁾ はアメリカとフランスの現代ホラーマンガとロマン主義の関係性を探り、複数の研究者によるアンソロジー論集『Monstrous Women in Comics』⁽²⁸⁾ はマンガに登場する「女性的怪物」について論じた。このようにモンスター理論を通してマンガを研究するケースも増えている。

3.3 モンスターの役割と進化

物語におけるモンスターの役割は複数あり⁽²⁹⁾、時代によって大きく変わってきた⁽³⁰⁾。文明の草創期においては、モンスターは文明外の存在であり、タブー、破壊力、危険、邪悪を表現するものであった⁽³¹⁾。文明社会の大きなタブーは「共食い」であったからこそ、モンスターは「人食い」という性質を持っていた⁽³²⁾。秩序がなければ文明は成り立たないことから、モンスターは論理や理性に欠ける混沌の塊であった。文明社会においては、大勢で共生することが安全であったため、文明の外にいる存在はとて恐ろしく危険なもの、つまり巨大なモンスターとして表現された^(33,34)。そして、そういった怪物はとにかく執拗に外から文明を攻撃してくる。理由もなく人間の文明社会を崩そうとする邪悪な破壊者であった⁽³⁵⁾ので、人は文明社会を尊び、神に選ばれた王などの英雄的存在によりそい、安全で安心な生活を求めた。このようなことから、英雄対「混沌の怪物」⁽³⁶⁾というテーマの物語は通文化的に神話や民話に繰り返し登場する。

やがて社会の発展に合わせて、モンス

ターも進化を遂げた⁽³⁷⁾。文明の外から攻撃してくるものだけではなく、社会内に住む望ましくない存在から社会を守らねばならないという考えが生まれた。社会がより複雑になると、社会が抱える問題も複雑になり、その複雑さを抑えるために、人々に適合性と従順性を求め、風習や見た目の違うもののモンスター化が始まり⁽³⁸⁾、「怪物人類」などを図鑑等でカテゴライズしようとし⁽³⁹⁾、「異形」の図像学(テラトロジー)の研究者が増加し⁽⁴⁰⁾、宗教学者は「善なる神がなぜ怪物を作るのか?怪物に魂はあるのか?」などといった、怪物の存在についての悩みを抱えるようになった⁽⁴¹⁾。こういった思考は各時代の文学を通して広がっていった。

社会が抱える悩みは現代に近づけば近くなるほど個人的な悩みに変質してきた。恐怖の対象が、社会の外部にいる巨人や街中に棲むマイノリティーから、普通の顔をしてすまして隣に住んでいる化け物へと変化し、さらには個人的人格の中に潜むモンスターにフォーカスされるようになる。こうした事情から心理学や哲学を通してモンスターについて考える人が増え⁽⁴²⁾、こういったテーマが題材となりやすい大衆文化やメディア研究者もモンスターについて言及し始めた⁽⁴³⁾。

モンスター理論以前の研究は主に、人間や動物の異形的出産の研究であるテラトロジー、神話、伝説、民話や大衆文化に登場する怪物を分析する研究、「他者」に対する心理分析が中心であった⁽⁴⁴⁾が、こういった研究はほぼ、モンスターを客体として捉えていた⁽⁴⁵⁾。モンスター理論の登場

でその考えが変わった。

「7つのテーゼ」は、「容易に展開できる全ての怪物をより理解するための理論⁽⁴⁶⁾」であり「フィールドの独創的なテキスト⁽⁴⁷⁾」と見なされる。少数意見としては、このテーゼは「人間」を解体するために「熱狂的に怪物を理想化する研究者は多い」と批判する立場もある⁽⁴⁸⁾。

コーエンのモンスター理論が発表されてから25年が経ち、「7つのテーゼ」はさまざまな場面で利用されてきた。コーエン自身も、2013年のエッセイ「モンスターの視線」⁽⁴⁹⁾や、2017年の、「時間と場所を横断するモンスターの能力」についてのコメント⁽⁵⁰⁾によって、元のテーゼの内容を拡張した。また、ナターシャ・L・ミクルズとジョセフ・P・レイコックのエッセイでは、「7つのテーゼ」に新しく「5つのテーゼ」が追加された。そこでは「モンスターへの信仰からの実際の個人的および社会的影響の考慮」や「共同体のアイデンティティの源」としてのモンスターの使用など、重要な新しいアイデアが追加された⁽⁵¹⁾。

今後もモンスター理論が深化されることは明らかだが、「7つのテーゼ」はその原点となるものであり、本稿では「鬼滅」を事例としてその有用性を明らかにしてみたいと考える。

4. 日本の代表的モンスター「鬼」

本研究で重点を置くモンスターは、日本の代表的な怪物、「鬼」である。「鬼」という言葉が英語に翻訳し難いと言われる原因

の一つは、その多面性である。鬼という観念は複雑な成立過程を有しており、鬼のビジュアルイメージにも多くの出所がある。日本において、古代の歴史書から現代のマンガ作品にまで登場する鬼の寿命の長さこそは、おそらく日本社会との共生・進化による結果なのだろう⁽⁵²⁾。

4.1 鬼の由来

鬼は多様なルーツから発展した存在であるが、主として日本土着の部分と中国渡来の部分に大別することができる。

古代日本では、鬼は目に見えない、形のない、災いなどの悲劇を運ぶ存在であった⁽⁵³⁾。嵐、地震などを引き起こし、特に雷・稲妻とつながるイメージが強い⁽⁵⁴⁾。鬼という名前が定着する前から、日本では、山に棲む悪霊⁽⁵⁵⁾、洞窟に潜む巨人⁽⁵⁶⁾、神の一種^(57,58)、海の向こうかあの世から訪れる賓客（まれびと）⁽⁵⁹⁾などの存在だったとも説かれる。風習が違う、天皇中心の社会の手に届かない範囲外の存在も「鬼」化されることがある⁽⁶⁰⁾。また、『古事記』に登場する黄泉醜女は鬼の前駆の一つとも言われる（石橋臥波）⁽⁶¹⁾。それぞれの観念が現在考えられるような「鬼」として固定したのは、複数の妖怪を一つの領域にまとめた中村惕斎の『訓蒙図彙』⁽⁶²⁾や、より細かく妖怪や鬼をカテゴライズした寺島良安の『和漢三才図会』などの近世の図鑑である。こういった図鑑は大きな人気を呼び、中に描かれた中国の絵巻や図鑑などから影響を受けたデザインは、現代でも使われる鬼を代表するイメージになった⁽⁶³⁾。

4.2 鬼の古典的なイメージ

このように鬼の由来は様々であるが、一方で現代における「鬼」というイメージはわりと固定したものである。鬼は「巨大」で「邪悪」で「人喰い」であり、「角」「牙」「巨大な目」を持ち、身体に「剛毛」を有し、服として「虎柄の下着」を履き、武器として「棍棒」を握り、「雷」を操る力を持つ。肌の色は多様で、角の数、目の数、指の数、などのバリエーションは多いにしても、そのイメージは割と統一性をもっている。

4.2.1 マンガ等に登場する古典的な鬼

昔話がベースになっているアニメ『まんが日本昔ばなし』では、鬼は可愛らしい生き物として描かれることもあり⁽⁶⁴⁾、短編マンガ作品である日野日出志「蔵六の奇病」⁽⁶⁵⁾や永井豪「白い世界の怪物」⁽⁶⁶⁾では、昔からある日本の伝統的風習の光景の中、鬼のような面を被った人間が違和感なく登場する。「白い世界」では、怪物と思われたものはナマハゲの様な面を被った青年だった。「奇病」では、村人たちが純朴な蔵六を退治する（殺す）ために鬼に似た面を被って、怪物の姿になる。誰一人傷つけない蔵六を恐れて、心を鬼にした村人たちにふさわしい姿であり、双方のストーリーとも、「怖く見えるものも実は怖くない」というテーマや、「本当の鬼は人間だ」というテーマを含んでいる。

永井豪の他の短編「夜に来た鬼」⁽⁶⁷⁾は現代の設定だが、ここでも古典的な姿をした鬼たちが登場する。宇宙船に乗って日本を攻撃する鬼たちは、「桃太郎」伝説の鬼退治が事実の歴史と思い込み復讐する。高

橋留美子の人気作品『うる星やつら』⁽⁶⁸⁾にも、宇宙から来た、角、牙、虎柄、雷という古典的な要素を持つ鬼が登場する。このように、古典的な鬼は昔話以外のサイエンスフィクションやギャグの世界でも違和感なく登場している。

4.3 「鬼滅の刃」の鬼たち

世界中で人気のマンガ作品「鬼滅の刃」は少年マンガ雑誌『週刊少年ジャンプ』で2016年に連載開始し、2020年に完結した。簡単に内容をまとめると、主人公の竈門炭治郎は鬼にされた妹禰豆子を人間に戻す方法を見つけるために、鬼を退治する集団「鬼殺隊」に入り、仲間と力を合わせながら鬼のリーダー的存在である鬼舞辻無惨とその子分の鬼と戦う、というストーリーである。

本作は冒険、教養小説、戦い、ホラーなどの要素が含まれているが、大事な要素がもう一つあり、それが敵対者としての「鬼」の登場である。しかし、この作品に登場する鬼の姿かたちは古典的な鬼と大分変わっている。鬼というラベルが付かなければ、一見すると鬼とは思われないかもしれないが、確実に古典的な鬼の要素が入っている。

「鬼滅」の鬼が古典的な鬼と共通している要素は「人を食う」「姿は様々」「大きさが様々（ただし、特別に巨大ではない）」「牙がある」「角があるものとなないものが存在する」「目の数は様々（多くは2つ）」「再生できる」などが含まれる。異なっている要素には「人を食べれば食べるほど階級が上がり、力も強くなる」「逆に、人を

食べないと上のものに認められず、殺されてしまう」「全ての鬼は、(親分的存在の)鬼舞辻無惨の力によって人間から鬼になった」「首を切られることや太陽の光を浴びることで死ぬ(吸血鬼を思わせる弱点)」などが含まれる。

古典的な要素を残すことによって、文化における長い歴史を持つ「鬼」という観念に結びつけることができ、時代を超えるモンスターを登場させられるが、現代に合う、より複雑なデザインで作り上げることによって、ストーリー上での「鬼」の役割をより複雑化できる。以下では「モンスター理論」を通して、その役割を分析する。

5. モンスター理論の「鬼滅の刃」への適用

「モンスター理論」とは、モンスターや怪物的存在を理解することが、私達が自分自身を理解するためにも不可欠であるという考えに焦点を当てた文学理論である。

つまり、「モンスターから何を学べるのか」を問う学問であるとも言える。モンスターを客体として捉えていた以前の研究と異なって、モンスター理論ではモンスターを主体として捉えることを試みるのである⁽⁶⁹⁾。

5.1 「7つのテーゼ」

1996年に出版されたコーエン編集のアンソロジー本『Monster Theory』は、多様な分野にわたる現代のモンスター研究の基礎を形成するのに役立ついくつかの重要なエッセイを収録している。巻頭のエッセイ

はコーエン執筆の「モンスター文化(7つのテーゼ)」である。このエッセイは、未だに残っている「モンスターに対する単純な心理的仮定」を否定し、「文化の象徴としてのモンスター」像を示した画期的な論考である⁽⁷⁰⁾。以下に、この「7つのテーゼ」を一つずつ解説する。

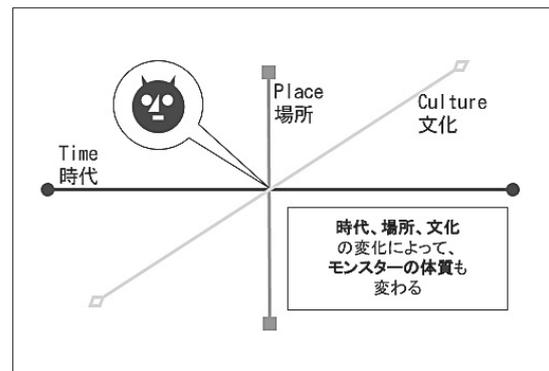


図1 テーゼ1

5.1.1 テーゼ1 「モンスターの身体は文化を表現する体系」(The Monster's Body is a Cultural Body)

モンスターはある特定の時空に表現される存在で、恐怖、欲望、不安、夢幻(静穏作用的、扇動的)の反映⁽⁷¹⁾であるので、歴史的背景に基づいた存在だと言える⁽⁷²⁾。少しでも違う「時代」「場所」「文化」に登場すると、同じモンスターさえ異なる性質を持つのだ⁽⁷³⁾。

5.1.1.1 応用

鬼になった主人公炭治郎の妹禰豆子が鬼殺隊隊員の義勇に殺されかけるシーンでは、自分が無知、無力、力不足と思い込んでいた炭治郎が、義勇の言葉「生殺与奪の権を他人に握らせるな!!」を聞いて、自分のもつ想像力で戦略を考え、自分もつ斧

のちからを使い、禰豆子を救うことにつながる⁽⁷⁴⁾。この時の炭治郎の動きは、恐怖と無知から生まれたと考えられる「学習性無力感」⁽⁷⁵⁾、いわゆる自分の中にある障害物（モンスター）を、「想像力と客観性」をもとに戦って、乗り越えることを表している。普段、人は行動について悩む時は社会が示す「常識」に従うが、義勇が鬼殺隊の「鬼を退治する」という常識に従ったとしたら、罪の無い被害者である禰豆子を殺したであろう。禰豆子は鬼でも、単純に邪悪ではないので、他の時代の鬼より複雑な存在だ。まさに、善悪の区切りがぼやけた現代に相応しいモンスターの表れとなる。

5.1.2 テーゼ2「モンスターは必ず逃亡する」(The Monster Always Escapes)

コーエンは「少しずつ異なる服を着て戻り、毎回、現代の社会運動や特定の決定的な出来事に照らして読まれることになる」と説く⁽⁷⁶⁾。抑制された社会における恐怖の対象がモンスターとして表現され、その逃亡や脱出の際、社会は退治の儀式を繰り返して現状を維持しようと努めるが、モンスターについて完全な理解がないため、フロイトの『快感原則の彼岸』⁽⁷⁷⁾のように、そういった恐怖対象は一時的にしか退治されない。様々なメディアで、モンスターは無限の続編、または『ドラキュラ』の話のように多くの反復を何度も生み出し、各時代にあわせて更新されるのである。

5.1.2.1 応用

「鬼退治」という儀式には「鬼」は必要であり、絶対になくならない存在である。

モンスターは「社会」「地域」「家族」「個人」などにとっては、退治すべき敵として必要とされる存在であるが、テーゼ1で述べたように、状況に合わせて進化をする。「鬼」が様々な時代や空間にいられる理由の一つは可鍛性である。

「鬼滅」には、空間を操って闇に消える鬼が存在する⁽⁷⁸⁾。これを退治するためには、トラウマと直面するかのように炭治郎は闇の中まで追いかける必要があった。モンスターの進化と同様、炭治郎の成長に合わせて人生のハードルはより複雑になり、戦う相手の鬼も単純な古典的な特徴が多い鬼から、手鬼⁽⁷⁹⁾の様に独自性や柔軟性が溢れる複雑な鬼になっていく。退治されては復活。単純な繰り返しに見えても退治する方もされる方も変わっていくが決して完全に消えることはない。

5.1.3 テーゼ3「モンスターはカテゴリークライシスの兆し」(The Monster is the Harbinger of Category Crisis)

旧来の図鑑などで、鬼や妖怪をカテゴライズする動機の一つは、人の恐怖の在り方を分類・定義することである。そうすることによって、その恐怖に対しての支配権を少しだけ人間側に戻すことができる⁽⁸⁰⁾。ただし、現在の大衆文化に現れる鬼はそう簡単には分析できない。テーゼ2のように自然の法則に背き、「常識」から逃げつつ拒否し、存在するだけで「常識」という観念を弱体化させる。その形状の柔軟性や行動原理の不透明さに対して、人は不安をおぼえる。

5.1.3.1 応用

「鬼滅」では、人間が鬼にされた瞬間に理性を失い獣のようになる。そして、人間社会でのもっともいけないとされる行動、つまり人を食うことをする。こうやってはっきりと「人間」と「人間ではない」の区切りができる。人を食わない禰豆子の存在はその境界に跨り、カテゴリークライシスを起こす。

現代モンスターとしての禰豆子はこれ以外にも常識をあやふやにする力がある。禰豆子は状況に応じて身体の大きさを変えられるし、その力を発揮することによって子供っぽい可愛い姿、つまりプロゾフスカ=ブリュフチンスカが言う両義的である「可愛い怪物（モンスター・キューティー）」にもなり⁽⁸¹⁾、鬼の要素が最大の、大人の女性の身体的特徴と欲望に満ちている心理的側面の両方に対する恐怖を反映する原型とクリードやデュマが呼ぶ「女性的怪物（モンストラス・フェミニン）」^(82,83)にも変化する。「鬼滅」の鬼舞辻無惨もモンスターの姿をカモフラージュするために人間の家族を作るし、年齢⁽⁸⁴⁾や性別⁽⁸⁵⁾を自由に換えられ、無惨は典型的な性的役割に挑む存在で、その「性差流動性」は「男女」という2項分類を弱化する。二人は変容能力によって、複数の「ソーシャルタブーを表す側面がある」とみることができる⁽⁸⁶⁾。カテゴリークライシスが教えてくれることは、何がなんでも単純化させたくない行動はいくつかの枠を跨ぐ人に相応しくなくなってゆく。昔からのカテゴリーは役に立たない時があると教えてくれる。

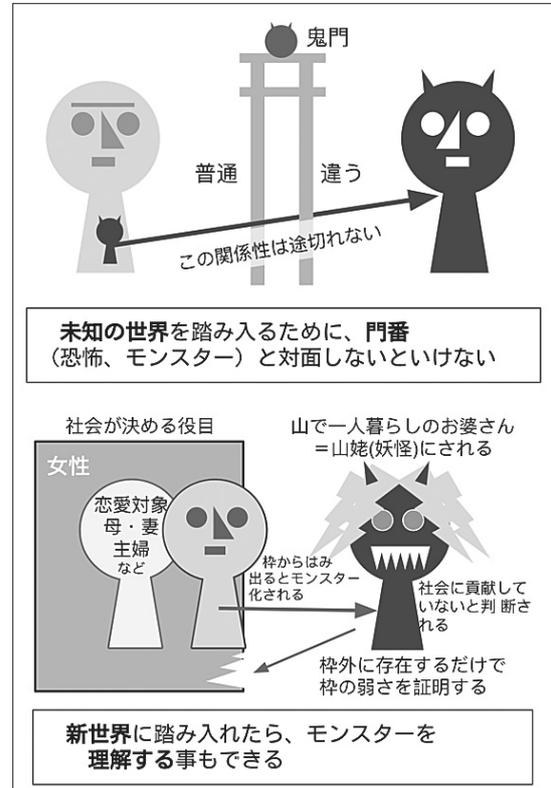


図2 テーゼ4

5.1.4 テーゼ4 「モンスターは「差異の入り口」に宿る」(The Monster Dwells at the Gate of Difference)

モンスターは文明、社会、個人にとって、アイデンティティを固めるための存在（テーゼ1）である。わかりやすく例えると、人は他のものに食べられることに恐怖を感じるため、「人を食べる」ことをタブーにする。世界の各文化で一番恐怖の対象となる存在は言うまでもなくこのタブーを破る人食い怪物である。人は「嫌い」「怖い」「忘れたい」存在を遠くへ追放したいのだが、クリステヴァの指摘によれば、自分のどこかにずっと意識してしまうことから永遠に消せない存在でもある⁽⁸⁷⁾（テーゼ2）。もっと深く自分を知るため

には、「正常」と「異常」とを分ける境界を越え、その恐怖対象と直面するしかない。ただし、その境をつき破るには、「未知」「無知」という番犬を倒す必要がある。馬場あき子が説くように、子供が大きくなって旦那がもういない女性は社会に貢献する力が薄れたとみなされ、村から出るか追い出され、山中で一人暮らしをする。共同体の外でも生きていける厄介者扱いとなり、いつの間にか「山姥」としてモンスター化されてしまい⁽⁸⁸⁾、そのものから人権を奪うことさえ正当化しやすくなるのである⁽⁸⁹⁾。

5.1.4.1 応用

「鬼滅」にも鬼を「殲滅する」と宣言する不死川実弥⁽⁹⁰⁾のように、鬼は退治すべき怪物という見方しかできない者もある。しかし、苦しむ鬼の妓夫太郎と自分が重なって見える炭治郎⁽⁹¹⁾のように「外見や習慣は違っても中身は人間と大して変わらない」ということに気づく者たちもある。この人たちは「鬼に助けられた」「家族が鬼になった」といったきっかけによって親しみを感じ、鬼に対する見方を変えたのである。脱構築という観点を採用することによって「他者との違い」という概念は人によって作られたものであることや、モンスターに対する恐怖心は社会固有のプロセスから作り上げた物ということが明らかになる⁽⁹²⁾。炭治郎が実弥に対して「善良な鬼と悪い鬼の区別もつかないのなら柱なんてやめてしまえ!!」⁽⁹³⁾と訴える時、読者は「見方」の改善を要求されているように感じるのである。

5.1.5 テーゼ5「モンスターは可能不可能の境界線を巡視する」(The Monster Polices the Border of the Possible)

モンスターは、「文化」の「関係のシステム」をまとめる絆を画定し、越えてはならない境界への注意を喚起させる⁽⁹⁴⁾。モンスターたちには、人間社会のような、コントロールが効く「階級」「組織」「社会」がないからこそ恐怖の対象となる⁽⁹⁵⁾。合理的な一般社会は「常識」を大事にし、社会に属する人々はある程度決まった範囲内で行動をして秩序を維持しており、人々が相互に監視しやすい環境でもある。よく言えば、こういう状況から「安心」が生まれるのだし、悪く言えば、窮屈と感じる人も現れる。変化を恐れる人にとっては、好奇心を生み出す探検などは危険だ⁽⁹⁶⁾と感じられ、外部に出て「獣」「野蛮人」「モンスター」などに襲われる話は「赤ずきんちゃん」や古地図に描かれた海の怪物のように昔から存在する。モンスターはある意味自由な存在であり、人間に不可能と思われる行動の可能性も教えてくれる。一例として女性に対しての社会的な縛りが数多くあるからこそ、ルールやタブーを放置する「女性的怪物」という存在が重要な意味を持つのである。

5.1.5.1 応用

「鬼滅」には、「“時空”って物理的限界」を自由に操る鬼がいて^(97,98)、「組織」「社会」などの「当たり前」がいかにもろいものかを教えてくれる。「普通」の世界から外に踏み入れた炭治郎はそのことに気づき、常識を考え直し、世界を変える

可能性を信じる。その結果、炭治郎は「鬼は退治すべき」という概念を転倒させようとする。常識を全て捨てるわけではなく、距離をおいて、客観的に社会や組織の残すべき部分と変えるべき部分が見られるようになる。決して異世界に逃げ込むのではなく、一旦外に探検し、新しい考えや知識を身につけてから、逃げる必要があった状況を変革するのである。「鬼滅」では、鬼を全て退治することによって世界が救われることは確かだが、各キャラクターの中にある悩みや問題は解決されないし、単純な答えは存在しない。鬼と戦うことによって、鬼滅隊の隊員は自分たちの思考を見つめ直すきっかけを得て、より進んだ見方をできるようになって鬼との戦い方に気づく。入り込んだ問題には手の込んだ答えが必要だと理解するようになる炭治郎たちはさらに成長し、強くなったのである。

5.1.6 テーゼ6「モンスターに対する恐怖心は実は好奇心」(The Fear of the Monster is Really a Kind of Desire)

モンスターは、正常化や秩序の維持に貢献するために禁止された行い「タブー」と常に関連している。モンスターが歴史上、途切れなく登場する理由は、モンスターの性質の中核にある「嫌悪」と「魅力」の同時性である⁽⁹⁹⁾。クリステヴァやクリードを通して、コーエンは「モンストラス(モンスター的)な存在は、恐怖と魅力の間にある、曖昧で原始的な空間に潜み、棄却(abjected)された文化の断片として、「個人的」「国家的」「文化的」「経済的」「性的」「心理的」「普遍的」「特定の」など、

あらゆる種類のアイデンティティの形成を可能にする」と説いている⁽¹⁰⁰⁾。ただし、人は追放した部分に対し「自分と違う」「タブー」と意識するからこそ興味を持ち(図3)、心理学に置ける「抑圧されたものの回帰」⁽¹⁰¹⁾のための隙間をモンスターに与え、退治したはずのものが何度も逃げ帰ってくる(テーゼ2)。



図3 テーゼ6

5.1.6.1 応用

「鬼滅」では、クリステヴァが言う「棄権」というテーマがわかりやすく表現される。鬼の兄妹、妓夫太郎と堕姫は二人だが一の鬼として認識される⁽¹⁰²⁾。綺麗な堕姫は「美しく強い鬼は何をしてもいいのよ」⁽¹⁰³⁾と言い「汚い」「不細工」な人は嫌いで、「醜い人間に生きてる価値ないんだか

ら」⁽¹⁰⁴⁾と発言することから、そのアイデンティティーは「美しさ」にあると言える。ただし、墮姫は兄に助けを求めたり、最後の最後に「何回生まれ変わってもアタシはお兄ちゃんの妹になる絶対に!!」と主張し⁽¹⁰⁵⁾、妓夫太郎も「俺たちは二人なら最強だ」と以前に発したことを思い出す⁽¹⁰⁶⁾。墮姫は醜い兄の存在を隠し、醜いものは嫌いと言いながら捨てきれない。醜いものを下に見ることによって自分に価値があるように思っていることも認める。読者にも、自分の嫌いな一部を直面し、なぜ嫌いで怖いのかを理解することによって自分の中から湧いてくる強さに気づき、妓夫太郎と墮姫のように、無惨が求めたような強さは本当の強さではないことに気付かせるのだ。人は毛嫌いする物を深く理解することで、嫌いになる必要があるかどうかを考え直すきっかけとなり、人の成長に繋がる。

5.1.7 テーゼ7「モンスターは「生成の分岐点」に立つ」(The Monster Stands at the Threshold... of Becoming)

コーエンは「モンスターは我々の子供である」と述べ、人間の直面したくない部分から生まれてくるもので、追放・退治されたモンスターは人間の弱さについて人間以上に理解している。そうでなければ、人間を怖がせることはできないはずだと説く。知的に進化したモンスターは人間社会を攻撃し「文化的仮定を再評価することを求める」⁽¹⁰⁷⁾。フランケンシュタインの怪物のように、生みの親(人間)にどう責任をとるかを問う。人間は、自分たちの「常識」

が一切揺らがぬよう、怪物をとにかく破壊しようとする。モンスターの存在を理解しようとする人間は、モンスターを生み出した環境や要因を考え、自分の中にあるモンスター的な部分とモンスターの中にある自分との共通点を理解することによって社会や文化の正すべき部分が見えてくる。

5.1.7.1 応用

「鬼滅」には、「成長」「進化」「覚醒」というテーマが含まれ、鬼も人間も以前の自分とは別の何かに「成る」ことがある。「鬼滅」では、自分に何か足りないと思う人間が鬼になることがあり、自分の力を信じもせず、墮姫、獺岳、黒死牟のように、誰かに求められるために恐ろしいモンスターになるキャラも複数いる。無惨に求められるために人を殺して食べ、強くなる⁽¹⁰⁸⁾。こうして鬼は人間の恐怖心や弱さから生まれる。一方、杏寿郎⁽¹⁰⁹⁾、玄弥⁽¹¹⁰⁾、カナヲ⁽¹¹¹⁾といったキャラクターたちも、自分に何か足りないと感じ、強くなるために鬼殺隊になる。自分の弱さと闘争しながら強くなる鬼殺隊員は、「鬼」というモンスターと出会えるからこそ強い自分として生まれ変わる。モンスターは人間の親であり、子供であると言える。これに気づく炭治郎はそのようなことを理解し、鬼を人間のように扱うからこそ、手鬼が退治される場面のように鬼は最後の最後に本当の自分を見つけ、成仏できるようになる。

6. 結論

モンスター理論のベースとなる「7つのテーゼ」の視点を適用することで、「鬼滅の刃」のような現代少年マンガの代表的人気作品における「鬼」の位置づけをより深く理解することができ、作者の意図もより明確になった。

「鬼滅の刃」には様々なテーマが含まれるが、「鬼」という視点からみることで、「上下関係」「他者に対する見方」「ジェンダー表現」など、今まで「常識」というラベルで片付けられてきた考えの正しさについて、もう一度見直してみることの重要性こそが、一番読者に伝えたいメッセージだと考えられる。「鬼滅」の鬼社会のヒエラルキーを固めるのは「貪欲さ」と「恐怖」である。鬼になった人々は、自分の弱さによって自分の運命が自分で決められないことを恐れ、「強くなりたい」という願望を持っているが、結局組織の上につつ無惨に従わないと殺されてしまうことを恐れている。無惨の名前を口にただけで命を奪われるような理不尽な状況になっている。それと比較して、鬼殺隊のヒエラルキーでは、鬼になった禰豆子を殺さなければならないというルールを破る義勇と炭治郎に対して、組織の一番上位にいる産屋敷耀哉は、自動的に罰するのではなく、状況を確認した上で禰豆子は生かすべきと判断するという、より道理的な行動をとる。読者は「鬼の社会は理不尽であることは当たり前」と思いがちだが、猗窩座という鬼は歯が入った状態で生まれたことによって「鬼子」と呼ばれる⁽¹¹²⁾、貧乏であることは許

されない⁽¹¹³⁾、猗窩座を救ってくれた慶藏と愛してくれた恋雪は嫉妬する人間たちに、卑怯な毒殺によって殺害される⁽¹¹⁴⁾など、理不尽な人間社会を捨てて、鬼になっている。本稿で論じたように、モンスター理論のテーゼ1「モンスターの身体は文化を表現する体系」という観点から見ることで、「鬼の社会」は「人間社会」の理不尽さを表していることが明らかになるのである。

現代における「事実」や「現実」の希薄化、つまり常識的な「家族」「社会」などの形の不安定化に対する不安が、作品では「鬼の存在」を知る前と後の主人公たちを通して表現されている。マンガの作品中でも現実でも、そのような不安定な世界で生きるのは容易ではない。主人公たちがさまざまな困難に直面する姿を通して、モンスター化、疎外、スケープゴート化などの様相が明瞭となり、物語の主人公たちの反発の仕方には、読者に対する生きるヒントが隠されている。炭治郎は「答えは一つではない」と信じ、「想像力」を発揮し、果敢に行動する。そうした行動の結果、新しい経験と出会いを得て成長し、その考えも進化することになるのだ。

昔と比べて複雑になっている現代作品の「鬼」に対する対処法は、答えを単純化せず、複雑な問題をじっくりと考えることが大事だ。炭治郎は、目に見える「現実」には限りがあると優れた嗅覚でとらえ、「いろいろな見方がある」と解っていて、鬼に対して「怒り」という感情に任せず、根拠に基づいて「人間から生じた鬼は人間とほぼ変わらない」、「悪い鬼も良い鬼も両方い

る」といった客観的な見方ができている。彼の見方が広がったきっかけはモンスター（禰豆子、珠世）との出会いである。モンスター理論が示してくれる読み方を踏まえれば、これらの作品自体が読者にとってその理論との出会いになり、「他者に対する考え」や「社会における自分の立場」などを普段と別の感覚でとらえるきっかけになる。7つのテーゼを通して物語をとらえることで、モンスターが持つ意味をより深く理解することが可能となり、自分自身についてもより理解できるようになるだろう。

参考文献

1. Jeffrey Jerome Cohen, 'Monster Culture (Seven Theses)', *Monster Theory: Reading Culture*, University of Minnesota, 1996, pp. 3-25 (J・J・コーエン (上岡伸雄・田辺章訳)「怪物文化 (七つの命題)」、『ユリイカ』、青土社、第31巻6号、1999年、p.64~p.82として邦訳が紹介された。)
2. Asa Simon Mittman and Marcus Hensel, 'Introduction: A Marvel of Monsters', *Classic Readings on Monster Theory: Demonstrate Volume 1*, Arc Humanities, 2018, p. x
3. Jeffrey Andrew Weinstock, 'Introduction: A Genealogy of Monster Theory', *The Monster Theory Reader*, 2020, Locs. 5-891 (Kindle)
4. W. Scott Poole, 'Foreword', *Monsters In The Classroom: Essays On Teaching What Scares Us*, McFarland, 2017, p.4
5. Maaheen Ahmed, *Monstrous Imaginaries: The Legacy of Romanticism in Comics*, University Press of Mississippi, 2020, p.5
6. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 1巻』集英社、2016年
7. Noriko T. Reider, *Japanese Demon Lore*, Utah State University, 2006, p. xviii
8. Cohen, *op. cit.*, pp.3-25
9. モンスター研究の歴史については、「Asa Simon Mittman, 'Introduction: The Impact of Monsters and Monster Studies', *The Ashgate Research Companion to Monsters and the Monstrous*, Ashgate, 2013, pp.1-14」が詳しい。
10. 井島由香「『鬼滅の刃』流 強い自分のつくり方」アスコム、2020年
11. 大勝裕史「『鬼滅の刃』における〈怪物的なもの〉:資本主義の隠喩としての人喰い怪物」、『東京経営短期大学紀要』29号、2021年
12. Adam Golub and Heather Richardson Hayton, 'Introduction: Monstrous Pedagogies', *Monsters in the Classroom: Essays on Teaching What Scares Us*, McFarland, 2017, pp.9-10
13. Andrew Aberdein, 'Mathematical Monsters', *Monsters, Monstrosities, and the Monstrous in Culture in Society*, Vernon, 2020, p.391
14. Natasha Mikles and Joseph P. Laycock, 'Five Further Theses on Monster Theory and Religious Studies', *Religion, Culture, and the Monstrous: Of Gods and Monsters*, Lexington, 2021, p.6
15. Caroline Joan S. Picart and John Edgar Browning, 'Introduction', *Speaking of Monsters: A Teratological Anthology*, Palgrave, 2021, pp. 2-6
16. Golub and Richardson, *op. cit.*, p.9
17. Michel Foucault, 'Of Other Spaces', *Diacritics 16 no. 1 Spring*, Johns Hopkins University, 1986
18. Michel Foucault, *Madness and Civilization*, Vintage, 1973

19. John Law, *A Sociology of Monsters*, Routledge, 1991
20. Barbara Creed, *The Monstrous-Feminine: Film, Feminism, Psychoanalysis*, Routledge, 1993
21. Elizabeth Young, *Black Frankenstein: The Making of an American Metaphor*, NYU Press, 2008
22. Barry Keith Grant, *The Dread of Difference: Gender and the Horror Film*, University of Texas, 2015
23. Jack Halberstam, *Skin Shows: Gothic Horror and the Technology of Monsters*, Duke University, 1995
24. Harry M. Benshoff, *Monsters in the Closet: Homosexuality and the Horror Film*, Manchester University, 1997
25. Susan Stryker, 'My Words to Victor Frankenstein Above the Village of Chamounix: Performing Transgender Rage', *A Journal of Lesbian and Gay Studies Volume 1, Issue 3*, 1994
26. Qiana Whitted, *EC Comics: Race, Shock, and Social Protest*, Rutgers, 2019
27. Ahmed, *op. cit.*.
28. Samantha Langsdale and Elizabeth Rae Coody eds., *Monstrous Women in Comics*, University Press of Mississippi, 2020
29. Niall Scott, 'Introduction', *Monsters and the Monstrous: Myths and Metaphors of Enduring Evil*, Rodopi, 2007, p.1
30. John Edgar Browning, 'Towards a Monster Pedagogy: Reclaiming the Classroom for the Other', *Fear and Learning: Essays on the Pedagogy of Horror*, McFarland, 2013
31. David D. Gilmore, *Monsters: Evil Beings, Mythical Beasts, and All Manner of Imaginary Terrors*, University of Pennsylvania, 2003, pp. 23–46
32. *Ibid.*, p.17
33. *Ibid.*, p.6
34. Douglas R. Butturff, 'The Monsters and the Scholar: An Edition and Critical Study of the *Liber Monstrorum*', University of Illinois, 1968, p.24 (博士論文)
35. Norman R. Cohn, *Cosmos, Chaos, and the World to Come: The Ancient Roots of Apocalyptic Faith*, Yale University, 1993, p.21
36. *Ibid.*, p.22
37. Joseph Campbell, *The Hero with a Thousand Faces*, 2nd ed, Princeton, 1968, pp.337–338
38. Grant, *op. cit.*, p.123
39. Rudolf Wittkower, 'Marvels of the East: A Study in the History of Monsters', *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes Vol. 5*, Warburg Institute, 1942, pp.159–197
40. Rosemarie Garland Thomson, 'Introduction: From Wonder to Error — A Genealogy of Freak Discourse in Modernity', *Freakery: Cultural Spectacles of the Extraordinary Body*, NYU Press, 1996, p.4
41. Chet Van Duzer, 'Hic Sunt Dracones: The Geography and Cartography of Monsters', *The Ashgate Research Companion to Monsters and the Monstrous*, Ashgate, 2013, p.385
42. Weinstock, *op. cit.*, Locs. 641–648
43. Frank Jacob and Verena Bernardi, 'Introduction: All Around Monstrous or a Critical Insight into Human-Monster Relations', *All Around Monstrous: Monster Media in Their Historical Contexts*, Vernon, 2019, p. x

44. Weinstock, *op. cit.*, Loc. 143
45. *Ibid.*, Loc. 131
46. Natasha Mikles and Joseph P. Laycock, 'Five Further Theses on Monster Theory and Religious Studies', *Religion, Culture, and the Monstrous: Of Gods and Monsters*, Lexington, 2021 p.3
47. *Ibid.*, p.3
48. Ken Gelder, 'Introduction to Part Three', *The Horror Reader*, Routledge, 2000, p.82
49. Jeffrey Jerome Cohen, 'The Promise of Monsters', *The Ashgate Research Companion to Monsters and the Monstrous*, Ashgate, 2013, p. 568
50. Jeffrey Jerome Cohen, 'Monster Classroom: Seven Theses', *Monsters in the Classroom: Essays on Teaching What Scares Us*, McFarland, 2017, pp.228–236
51. Natasha Mikles and Joseph P. Laycock, 'Five Further Theses on Monster Theory and Religious Studies', *Religion, Culture, and the Monstrous: Of Gods and Monsters*, Lexington, 2021, pp.10–14
52. Reider, *op. cit.*, p. xviii
53. Kazuhiko Komatsu, 'Supernatural Apparitions and Domestic Life in Japan'. *The Japan Foundation Newsletter* 27, 1999, pp.1-5
54. 近藤喜博『日本の鬼 日本文化探求の視』桜楓社、1975年、pp.14–16
55. 和歌森太郎『神と仏の間』弘文堂、1975年、pp.119–122
56. 折口信夫「鬼と山人と」『折口信夫全集 17』中央公論社、1995年、p.121
57. 折口信夫「信太妻の話」『折口信夫全集 2』中央公論社、1995年、pp.283–285
58. 高橋昌明『酒呑童子の誕生—もうひとつの日本文化』中央公論社、1992年、p.4
59. 折口信夫「鬼の話」『折口信夫全集 3』中央公論社、1995年、pp.16–18
60. 小松和彦、内藤正敏『鬼が作った国日本』光文社、1990年、p.11
61. Reider, *op. cit.*, pp.2–4
62. 中村楊斎『訓蒙図彙』第四冊卷之四、国立国会図書館デジタルコレクション
63. Michael Dylan Foster, *Pandemonium and Parade: Japanese Demonology and the Culture of Yokai*, University of California, 2009, pp.35–43
64. テレビアニメ『まんが日本昔ばなし』1984年8月4日放送の話「地獄の鬼」(演出・作画フクハラ・ヒロカズ)
65. 日野日出志『蔵六の奇病』ひばり書房、1976年
66. 永井豪「白い世界の怪物」『週刊少年マガジン』1971年12月19日号』講談社、1971年
67. 永井豪「夜にきた鬼」『週刊少年マガジン』1978年5月号』講談社、1978年
68. 高橋留美子「うる星やつら」(初掲載)『週刊少年サンデー』1978年39号』小学館、1978年
69. Weinstock, *op. cit.*, Loc. 131
70. Poole, *op. cit.*, p.4
71. Cohen, 1996, *op. cit.*, p.4
72. Poole, *op. cit.*, p.5
73. Weinstock, *op. cit.*, p.99
74. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 1 巻』*op. cit.*, pp.38–49
75. 鎌原 雅彦, 亀谷 秀樹, 樋口 一辰、「人間の学習性無力感 (Learned Helplessness) に関する研究」『教育心理学研究 Vol. XXXI No.1』日本教育心理学会、1983年

76. Cohen, 1996, *op. cit.*, p.5
77. Sigmund Freud, *Beyond the Pleasure Principle*, International Psycho-analytical Press, 1922, p. 14
78. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 2 巻』集英社、2016 年 pp. 53–110
79. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 1 巻』*op. cit.*, pp. 153–192
80. Mittman, 2013, *op. cit.*, p.7
81. Maja Brzozowska-Brywczyńska, 'Monstrous/ Cute: Notes on the Ambivalent Nature of Cuteness', *Monsters and the Monstrous Myths and Metaphors of Enduring Evil*, Rodopi, 2007, pp.213 – 237
82. Creed, *op. cit.*, p.1
83. Duma, *op. cit.*, p.12
84. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 15 巻』集英社、2019 年 pp.54–56
85. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 16 巻』集英社、2019 年 p.170
86. Brzozowska-Brywczyńska, *op. cit.*, p.219
87. Cohen, 1996, *op. cit.*, p.19
88. 小松和彦「異人論 異人から他者へ」『岩波講座 現代社会学 〈3〉 他者・関係・コミュニケーション』岩波書店、1995 年、pp. 177–178
89. 小松、内藤、前掲書 p.11
90. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 8 巻』集英社、2017 年 p.108
91. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 11 巻』集英社、2018 年 p.91
92. Cohen, 1996, *op. cit.*, pp.14–15
93. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 6 巻』集英社、2017 年 p.52
94. Cohen, 1996, *op. cit.*, p.13
95. *Ibid.*, p.14
96. *Ibid.*, p.12
97. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 3 巻』集英社、2016 年 pp.99–105
98. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 6 巻』*op. cit.*, p.168
99. Cohen, 1996, *op. cit.*, pp.16–17
100. *Ibid.*, p.19
101. Sigmund Freud, "Moses and Monotheism: Three Essays", *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Vol. XXIII*, 1939, pp.1-137
102. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 10 巻』集英社、2018 年 pp.119–120
103. 『同上』 p.39
104. 『同上』 p.23
105. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 11 巻』*op. cit.*, p.178
106. 『同上』 p.179
107. Cohen, 1996, *op. cit.*, p.20
108. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 10 巻』*op. cit.*, p.16
109. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 7 巻』集英社、2017 年 pp.58–61
110. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 13 巻』集英社、2018 年 p.184
111. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 19 巻』集英社、2020 年 p.70
112. 吾峠呼世晴『鬼滅の刃 18 巻』集英社、2019 年 p.58
113. 『同上』 p.59
114. 『同上』 p.80

